



京大広報

号外

2007. 4

目次

〈入学式〉

- 学部入学式における総長のことば……………2374
- 大学院入学式における総長のことば……………2377

〈大学の動き〉

- 平成19年度学部入学式……………2380
- 平成19年度大学院入学式……………2381
- 平成19年度入学者選抜学力試験の結果……………2383
- 名誉教授称号授与式……………2384



平成19年度入学式



入学式

学部入学式における総長のことば

平成19年4月6日

総長 尾池和夫

京都大学に入学された、3,030名の皆さん、入学おめでとうございます。ご列席の西島安則元総長、長尾真前総長、名誉教授、副学長、各学部長、研究科長、研究所長、教職員とともに、心からお祝い申し上げます。

京都大学に入学するまでに、皆さんはさまざまな道を辿ってきたことでしょう。この式場におられる一人ひとりが辿った道を今思い返していることでしょう。ご家族の方々も、学習を支えてのこれまでの時間を思い起こしておられることでしょう。それぞれに長い間の努力が報われたという実感を持って、ここに列席しておられることと思います。学問の府にあって独り立ちした京都大学の学生としての成長を、ご家族の方々には、これからもあたたかく見守ってくださるようお願いいたします。

今年は京都の桜が早くから咲き始め、今多くの種類の桜が満開になって、皆さんの入学を祝福しています。広島市の「原爆桜」もきっと花を咲かせていることと思います。被爆して誰もが死んだものと思っていた桜が、何年かして花を咲かせるようになったと聞きます。谷川俊太郎さんの詩があります。「原爆をつくるな。つくるなら花をつくれ。つくるなら家をつくれ。つくるなら未来をつくれ。戦争にちからはかせない。だが平和のためになら！」という一節があります。

今年の1月23日は、湯川秀樹博士の生誕百年の記念日で、私たちはそれを記念してさまざまな行事を行ってきました。日本で初めてノーベル賞を受賞した湯川秀樹博士は、1907年生まれ、日本で2番目にノーベル賞を受けた朝永振一郎博士は1906年生まれです。素粒子論の分野における偉大な業績とともに、平和を願った両博士のことを忘れてはなりません。「ラッセル・アインシュタイン宣言」をもとに、カナダで開かれた「パグウォッシュ会議」に、湯川秀樹博



士と朝永振一郎博士は参加し、その後1962年の第1回科学者京都会議を開催しました。皆さんも物理学の功績を学ぶとともに、この2人の大先輩の平和への貢献を学んでほしいと思います。

社会には、さまざまな矛盾があります。しかし、これらは乗り切ることができないという前提に立つと、大学の大学たる意味がなくなります。皆さんもそのような課題に挑戦するため、総合大学の特長を活用して、幅広い知識を身につけながら、世界の先端に行く京都大学の特長を活かして、専門の分野へしっかりと向かってほしいと思います。

例えば地球環境です。自然環境を守るためには、エネルギーや物質資源を節約しなければなりません。炭酸ガスの排出量を減らすことが重要です。しかし、大学では実験機器を運転しないと最先端の研究を進めることができません。そのためには電力を必要とします。代替えのエネルギーを求めて石油以外の利用を奨励する人もいます。しかし中には企業が必要とする石油を確保するための論理もあり、大規模な戦争で石油を大量消費することがあります。さまざまな状況を観て自分で考えてみなければなりません。

京都大学は海外に34の拠点自ら設置しています。また日本の各地にも数10か所に教育と研究の拠点を置いています。例えば、犬山市には、霊長類研究所があります。そこには、チンパンジーのアイとアユムの親子がいます。アイは、1976年10月生まれの30歳の雌で、アユムは2000年4月24日生まれで、

もうすぐ7歳になる雄です。また、パンとパルの親子もいます。パンは1983年12月生まれの雌で、パルは2000年8月9日生まれの雌です。

霊長類研究所の松沢哲郎教授の講談社学術文庫「おかあさんになったアイ，チンパンジーの親子と文化」を読んでみてください。京都大学の基本理念にある「地球社会の調和ある共存」を理解するためには、地球社会のことをさまざまな面から知る必要があります。

松沢先生たちの観察から得られた知識は、チンパンジーがもって生まれた能力の高さと、生後の、とくに初期の成育環境の持つ重要性を教えています。「親がやっているようすを繰り返し見る。生後の毎日、その母親のうしろ姿をじっと見て学ぶことによって、子どもはいつのまにか、こんなことができるようになっていたのです」とその様子が描かれています。

「ジェーン・グドールさんがタンザニアのゴンベというところで野生チンパンジーの研究をはじめたのが1960年の7月16日ですから、2000年でちょうど40年でした。ということは、人類はまだだれも、たった一人のチンパンジーの一生さえ見ていません。何かチンパンジーのことがよくわかったかのように話してはいますが、一人のチンパンジーが生まれてから死ぬまでというのを、まだだれも見ることがないのです。それくらいの短い時間の中で少しわかってきたことを、いま紹介しているわけです」と松沢先生は述べています。大学における研究がいかに長い時間をかけて行われているかということがわかります。その息の長い研究活動から得られた貴重な知的財産が、大学の至る所に蓄積されています。皆さんはその知財を活用して学習し、新しい知を加えていくという貢献を、自身の努力で行っていく機会を持つことができるのであります。

再び松沢先生の本の引用ですが、「霊長類学というのは、多くの学問の中でもひじょうにユニークで、日本が発祥の地で世界に発信しているめずらしい学問です。多くの学問というのは西欧で生まれています。近代、現代の日本にとっては、西欧で発達した学問を明治はじめの130年前くらいに輸入して、それが日本に根づくというのが、多くの学問のパター

ンでした。しかし、霊長類学の場合には、日本で独自の発展をとげて世界へ発信していきました。その理由の一つは、先進諸国の中で野生のサルがいる国は日本だけだということです。」

同じことが、私の専門である地震学でも言えます。日本は先進諸国の中で、大地震や火山噴火によって国土のすべてが形成された国です。世界で最初の地震学会は、明治時代に日本で誕生しました。地震工学も日本人の提唱で生まれました。変動帯の特徴である「津波」という現象も「砂防」という工学の仕事も、今では国際語として日本語のまま呼ばれています。プレート収束域に発達した変動帯特有の地形と、中緯度の気候の特性が、日本列島独特の四季折々の景色を生み出し、活断層運動によって形成された京都や奈良や近江の盆地には、たっぷりと地下水が蓄えられ、そこに都市が生まれ、豊かな文化が育ちました。私はその日本の文化を「変動帯の文化」と呼んでいます。その美しい日本の自然と文化を守り、さらに育てていくことに貢献するのも京都大学の役割であり、皆さんの参加を待っている教育と研究と社会貢献の意味でもあります。

京都大学は1897年に創立されました。110年の歴史を持つ京都大学が、そのような教育と研究と社会貢献の役割を果たして来た中で、この大学は「自由の学風」という言葉で知られる大学になりました。1300年以上の歴史を持つ活断層盆地の京都で、最古の物語である「竹取物語」が生まれ、今年あたりは世界的文学である「源氏物語」生誕1000年になります。京都と周辺の地域は古都京都の世界遺産を持っています。そこで生まれた「自由の学風」を、これからも私たちは大切にしなければなりません。皆さんにも、その真の意味をよく考えながら学習に励んでほしいと思っています。

また、松沢先生の本からです。『ちなみに「エデュケーション」を「教育」と先人は訳しました。そのラテン語の語源は「エデュセール」です。「中にあるものを引き出す」というのが本来の意味です』というように京都大学が用意する「教育」は、教えるという他動詞の方式よりは、学び習うという自動詞の「学習」を基本として、「自学自習の精神」を伝えたいと思っています。

日本列島の変動帯の特性は、さまざまな日本の文化を育ててきました。夏目漱石の小説「こころ」は、英語に翻訳されたときには、結局「Kokoro」という題になりました。京都大学は「こころの未来研究センター」を新しく創設し、今週4月2日、初代の研究センター長として吉川左紀子教授に辞令をお渡ししました。そのような大学の変化の中で、皆さんは京都大学の学生として学習活動を始めます。この大学の110年の歴史と、その歴史の中で生まれた、さまざまな知財をぜひ学んでほしいと思います。

今年は日本が南極観測を本格的に始めて50周年を迎えます。最初から多くの隊員が京都大学から参加しました。湯川秀樹博士の誕生日でもある今年1月23日(火曜日)に、「南極地域観測事業開始50周年」の記念切手が発行されました。80円郵便切手10種1シートです。

1956年の1次隊は、砕氷船「宗谷」でオングル島に昭和基地を建設し、地球物理・気象の観測調査を始めましたが、オビ号による救出を受けることになりました。随伴船海鷹丸による海洋調査も行われました。1957年の2次隊は、「宗谷」が接岸できず、越冬を断念しました。そのとき残されていたタロとジロの生存が、1958年の3次隊に確認され、昭和基地が再開されました。1959年の4次隊では、昭和基地で福島 紳隊員が遭難し、亡くなりました。

最初の越冬隊長、西堀栄三郎さんは京都大学理学部、タロやジロを担当した北村泰一隊員も同じ理学部でした。遭難した福島 紳隊員も同じ理学部出身です。私にとっても、3回生のときの11月祭で、福島隊員の遺影の元、南極観測展を開催し、連日行列ができたことも、「南極物語」の撮影で夏目雅子さんたちが地球物理学教室に来られたことも、忘れ得ない思い出であります。

2005年から2008年の4年間で、昭和基地から残置廃棄物をすべてなくす計画があります。持ち帰りが完了した次の年からは、発生した廃棄物は廃棄物倉庫に保管して飛散を防ぎ、毎年すべて持ち帰って基地には残さない方針となっています。このような計画の意味を理解し、地球環境を皆で考え、もっとも大規模に環境破壊を進める戦争をなくすためにはどうすればいいかを、私たちはよく考えていかなけれ

ばなりません。

地球のことを考えるためには、地図をよく見る必要があります。皆さんはぜひ正確な地図を大切にすることを人になってほしいと思います。21世紀の人類の生存のためにも、南極は大切な大陸ですが、世界地図に南極大陸を描いていないものがあります。五大陸と言うときには、ユーラシア、北アメリカ、南アメリカ、アフリカ、オーストラリアで、南極大陸を含んでいません。それでは地球のことが理解できません。昨日、Googleで「五大陸」で検索すると13万件、「六大陸」で検索すると5万2千件ほどでした。まだ半部にもなりません。京都大学の学生の皆さんはぜひ六大陸派になってください。

京都大学総合博物館では、地理学教室100年を記念して、特別展「地図出版の400年－京都・日本・世界－」を開催しています。皆さんは、学生証で入館できます。ぜひそれを利用して見学し、いろいろの時代の世界観に地図を通して触れてください。常設展示も、ともに京都大学が持つ知財の一部を世界の人々に向かって公開するものです。ご家族の方たちも、ぜひこの機会にご覧いただきたいと思います。

このように京都大学では多くの課外の行事を展開します。例えば、時計台では「未来フォーラム」という企画があります。活躍している先輩たちに話していただきます。次は4月16日夕方の、日本電信電話株式会社代表取締役社長 和田紀夫さんの話です。このような機会は京都大学に入学したからこそ得られるもので、大いに利用してほしいと思います。

宇宙へ行ったという毛利 衛さんは、NHKの番組で「南極って、こんなに遠いのか」とコメントしていました。ご自分が行かれた宇宙と比べてですが、彼が行ったのは、実は地球圏というべきところで、高度400キロメートルあたりの空を飛行しました。本当の宇宙は、もちろん南極よりはるかに遠いのですが、スペースシャトルよりは、南極は日本から遠く、しかも到達するのに困難を伴います。また、宇宙へ飛ぶのと、地球の中へ行くのとでは、後者の方がはるかに困難であるというのも、確かです。

技術の進歩が科学を発展させます。今まで測定できなかった現象を精度よく測れるようになり、記憶容量が増えるとともに、今まで記録できなかった膨

大なデータが残されるようになり、コンピュータの速度が速くなって、できなかったシミュレーションが可能になります。「ちきゅう」という船ができて、これからようやく地球の中の研究が進みます。皆さんが未来に向かって進む道には、さまざまな魅力あふれる未知の課題が待っています。

皆さんは今まで、いろいろのことを学習して知識を蓄えてきました。その中で、自らの行く道を見つけて針路を選んだ方もきっと多いと思います。いずれにしても、今まではこの京都大学への道を進んできたことですが、これからは、世界に向かって、皆さんの時代には宇宙に向かってというべきでしょうが、京都大学の中から宇宙を見つめながら、住んでいる地球をしっかりと見つめながら、さらなる学習を続けていただきたいと思います。

また、在学中にぜひ外国留学して、外国の文化に

直接触れるようにしてください。海外から日本にいられた方は、日本の文化を蓄積した京都の伝統に触れる機会を持ってください。東アジア、とくに中国への留学もおすすめします。21世紀は東アジアの時代であり、英語と中国語は国際語として役立つ言語です。留学するためには自国語と自国の文化をよく学んでください。学生の中に留学した国の言葉は一生の財産になり、そこで皆さんは文化を伝える大使となり、得た友人は生涯の友となって、皆さんの人生を豊かにするでしょう。

何よりも自らの健康を大切に、友人を大切に、学習に、そして課外活動に、力一杯活躍してくださることを願って、大学生活を明るく楽しく過ごしてくださることを願って、私の入学式の式辞といたします。

京都大学入学、まことにおめでとうございます。

大学院入学式における総長のことば

平成19年4月6日

総長 尾 池 和 夫

本日、京都大学大学院に入学した修士課程2,202名、専門職学位課程337名、博士(後期)課程869名の皆さん、入学おめでとうございます。ご列席の副学長、研究科長、研究所長、教職員とともに、皆さんの入学を心からお慶び申し上げます。

皆さんは学問の道をさらに究めんとして、また新しい問題を提起し、懸案の問題の解決に挑戦しつつ、さまざまな学問領域へ、さらなる一步を踏み出すために進学されました。あるいは、今までの学習や研究とは異なる方向へ、自ら転換をはかるために進学された方もおられることでしょう。また、専門の分野で高度の知識を持って、国際的に活躍するために



進学された方もおられます。いずれにしても新たな飛躍を求めて、大学院における学習と研究の道へ進まれたのです。くれぐれも心身の健康に留意され、総合大学の特長を活かして、可能な限り幅広く知識を身につけながら、京都大学での学園生活を楽しくつつ、学問を深めていただきたいと思います。

大学院設置基準に定められている大学院の課程は、「修士課程」「博士課程」「専門職学位課程」の3種

であり、博士課程は、前期2年と後期3年に区分するものと、後期3年のみの課程のもの、区分を設けないもの、4年制博士課程などがあり、博士課程のうち前期2年に区分された課程は修士課程とみなすことになっているというように、大学院にはさまざまな形態があります。専門職学位課程もそれぞれの分野ごとにその課程が定められており、皆さんはそれぞれの道を選んで進学してこられました。京都大学はそれらの課程で、皆さんが学習と研究を力一杯進めていけるように、キャンパスの整備に努めています。

4月の初めには日本学術会議の総会が開催されます。日本学術会議は、アメリカ合衆国のナショナル・リサーチ・カウンシル(NRC)をモデルとして、1949年に設立されました。そのころ、南極地域観測への参加、原子力利用の平和三原則、霊長類研究所の設立などを提言して、それらが政策に反映されました。いずれも京都大学の諸先輩たちが深く関わりながら、それらの提言をまとめてきたものであります。南極観測は1957年に始まり今年で50周年を迎えました。京都大学の原子炉実験所は1963年に設置され、霊長類研究所は1967年に設置されて今年で40周年になります。

その後は、各省庁が審議会方式を強化したりして日本学術会議の発言力は低下しましたが、行政改革の一部として大改革が行われ、2005年4月2日に「日本の科学技術政策の要諦」を発表し、現在の日本社会の歴史的背景、2050年への国家ビジョン、それに至る2020年への政策ミッションを示しました。2050年を目標とする、品格ある国家、アジアの信頼の構築、3つの目標ミッション、10の主要課題など、日本学術会議の提唱をよく読んで皆さんにもその課題を考えてみてほしいと思います。

21世紀の地球共通課題は「地球環境劣化」、「人口増加」、「南北格差拡大」であり、国家ビジョンの目標ミッションを、人類社会の「持続可能性サステナビリティ」であるとしています。この課題に対し「環境と経済の両立」の具現化を通して、国家ビジョンを達成するとしています。国家の根幹は「人づくり」であるとして、科学と科学技術の戦略的活用と一体的に、次代を担う人材の育成を進めることは最重要事項で

あると、この要諦に示されました。

目標ミッションの主要課題は、1)教育の改革、2)民主社会の実現、3)共生社会の実現、4)国の安全保障の確保：安全と安心、5)健やかに生きる社会基盤、6)産業、経済、労働と雇用政策、7)自然との共生、自然の再生、8)国土と地域の再生、9)情報・通信システム整備、10)エネルギーと環境であります。

皆さんの中には科学者としての道を選ぼうとしておられる方も多いと思います。その方たちには、朝永振一郎博士の詩を紹介したいと思いました。「ふしぎだと思うこと／これが科学の芽です／よく観察してたしかめ／そして考えること／これが科学の茎です／そうして最後になぞがとける／これが科学の花です」

これは科学の花を咲かせた朝永博士の実感から生まれた言葉ですが、皆さんもこの言葉の通りの体験を、これからの長い時間をかけた根気強い努力と、強い運と、持って生まれた才能の効果的な運用で、きっと実感されることになると思います。そこでは、どんなことであっても、まずその分野の第1人者になることを目指さなければなりません。例えば、京都大学と言えば自由の学風、自由の学風と言えば京都大学と言われるように、自分の氏名と自分が専門とする分野が1対1に対応するようになることを目指して学習と研究を進めてください。

京都盆地は活断層運動によって形成された盆地で、京都大学の吉田キャンパスの東にある吉田山の西の麓は、花折断層で上下にずれる場所です。私は学部の新入生を案内して、毎年4月にはこの花折断層を歩きます。今年1927年3月7日の北丹後地震から80年です。また、1707年、南海トラフに起こった超巨大地震である宝永地震から300年です。早ければ2030年頃起こる次の超巨大地震に備えて、地球のことを一緒に考えながら歩きます。

宇治キャンパスは黄檗断層に沿っていて、その運動で下がる地盤にあります。桂キャンパスは、西山断層で上がる地盤にあります。そのような活断層の破碎帯に沿って、昔の人たちは地盤が崩れないように孟宗竹を植えました。桂にも山科にも竹林ができましたが、杉や檜の人工林と同じように、最近では手

入れが行われないうちに、防災や環境に関わるこれからの大きな課題を私たちに与えています。

竹と言えば上田弘一郎、上田弘一郎と言えば竹という先生が京都大学におられました。農学部に演習林を導入して、1949(昭和24)年に演習林の初代専任教授となった上田弘一郎先生は、資源として竹類の重要性に着目して、各専門分野の研究者を結集し、竹の生理生態的特性や、繁殖、育成に関する研究を進めたと演習林の歴史に記されています。

竹は、イネ科タケ亜科に属する多年生常緑草本植物で大型のものの総称と言われますが、タケ科とすることもあり、竹を草本とするか木本とするかの議論もあります。要するに何をもちいて木とするかという議論です。年輪ができる植物を木本類、できない植物を草本類と定義する場合や、木とは、厚くなった細胞質を持つ死んだ細胞により生体が支持されている植物であるという見方もあります。竹は「連続的に成長」しないので「草」であるというか、後者の定義に従うと、「死んだ細胞で支持されている」ので「木」と言うことになるかですが、上田弘一郎先生は『竹は木のように木でなく、草のように草でなく、竹は竹だ』と力説しておられたそうです。その分野の第一人者になるとこのような発言が歴史に残ります。

この部分を書くために Google で「竹の専門家」と入れて検索したら、私の書いた「竹と筍と桂キャンパス」という題のエッセイが最初に出てきて、久しぶりに自分のエッセイを読みました。それによると、「筍は同じ根の竹のクローンである。節の数は根のつながる竹で同じになる。筍の皮の一枚につき、節が一つできるから、筍の皮の数と横の竹の節の数と同じだということになる。筍は竹の分身であり、地下茎から芽を出して、自分の分身を作る。筍の栄養は親の竹からもらう。

何十年に一度かは、竹は花が咲いて枯れてしまうが、そのとき遺伝子を交換する。それまでは、同じ遺伝子を持つ竹と筍が広い地域に分布しているので、ある年は一斉に筍が豊作だったり、日本から移植した竹の林が、日本の竹と同じ年に花を咲かせたり、さまざまな不思議な現象が起こって話題になったことがある」と書いてあります。

日本には、マダケ、モウソウチク、ハチクと数百

種類の竹がありますが、その多くは帰化植物でほとんど中国原産です。竹は、気候が温暖で湿潤な地域に生息し、アジアの温帯から熱帯地域に多く分布します。中国でも東南アジアでもビルの建設現場の足場が竹で組まれている光景をよく見ます。一部の竹は周期的に開花して、一斉に枯れることがあります。マダケの場合は120年周期であるという推定もあります。竹は成長力が強く、早いときには1日で1メートル以上成長することがあります。四川省ではジャイアントパンダが竹を主食としています。1976年の四川省と雲南省の境界付近で大規模な地震が発生したとき、四川省の森林では竹の花が咲いて枯れ、ジャイアントパンダの食糧が不足して、被害が出ているという報告があり、四川省の友人からパンダの死骸の写真をもらいました。

竹は一つの例ですが、最初に紹介した日本学術会議があげた、これから21世紀の課題のさまざまな場面でこの竹が登場し、そのとき上田弘一郎先生の業績が思い起こされることになるでしょう。今週の初め、桂キャンパスで、手入れが行われずに密集した竹林を見ながら、私も地震の研究者として、竹の存在に注目して、いろいろのことを考えました。

研究はおもしろいから続けるのですが、人びとが何を知りたいと思っているかを知っていて研究を進めることも、大学院で研究する場合に大切なことの一つです。研究者として論文を発表するだけでなく、その研究成果を市民にもわかりやすく伝えながら、また自らも社会貢献の一端を担うのだということに心を配りながら、大学院での学習と研究を行ってほしいと思います。常に広い視野を持ち続けることを心がけ、国際社会に貢献する人材であることを心がけていただきたいと思います。

今、総合博物館では、地理学教室100年を記念して、特別展「地図出版の400年－京都・日本・世界－」を開催しています。地図を通していろいろな時代の世界観に触れることができます。京都大学の豊かな知財の蓄積を精一杯活用しながら学習や研究を進め、皆さんが21世紀の国際社会の中で、元気に活躍されるようになることを祈って、私のお祝いの言葉いたします。

大学院入学、まことにおめでとうございます。

大学の動き

平成19年度学部入学式

平成19年度学部入学式が、4月6日(金)午前10時より、西島安則元総長、長尾 真前総長、名誉教授はじめ各部局長等の出席のもとに、本学総合体育館にて挙行された。

京都大学交響楽団演奏、合唱団による学歌斉唱に続き、「総長のことば」があり、午前10時30分に終了した。

今年度の新入生数は、次のとおりである。

区分 学部	一般入試 (前期)	一般入試 (後期)	外国学校 出身者選抜	外国人留学生 特別選抜	編入学	再入学	学士入学	合計
総合人間学部	124人	—人	—人	—人	—人	1人	1人	126人
文学部	223	—	—	—	—	—	2	225
教育学部	61	—	—	—	9	—	—	70
法学部	332	—	4	1	9	—	—	346
経済学部	238	—	6	6	9	—	2	261
理学部	317	—	—	—	—	—	—	317
医学部	235	21	—	—	14	—	—	270
薬学部	86	—	—	2	—	—	—	88
工学部	958	—	—	19	25	—	—	1,002
農学部	322	—	—	3	—	—	—	325
合計	2,896	21	10	31	66	1	5	3,030



平成19年度大学院入学式

平成19年度大学院入学式が、4月6日(金)午後3時より、名誉教授はじめ各部局長等の出席のもとに、本学総合体育館にて挙行された。

京都大学交響楽団演奏、合唱団による学歌斉唱に

続き、「総長のことば」があり、午後3時30分に終了した。

今年度の新入生数は、次のとおりである。

区分 研究科	修士課程			合計
	入学	外国人留学生		
		国費	私費等	
文学研究科	97 ^人	2 ^人	7 ^人	106 ^人
教育学研究科	43	-	5	48
法学研究科	5	-	10	15
経済学研究科	16	6	6	28
理学研究科	316	1	2	319
医学研究科	55	1	-	56
薬学研究科	91	3	4	98
工学研究科	638	8	23	669
農学研究科	291	2	5	298
人間・環境学研究科	124	5	17	146
エネルギー科学研究科	99	2	1	102
情報学研究科	174	3	16	193
生命科学研究科	86	-	-	86
地球環境学舎	36	1	1	38
合計	2,071	34	97	2,202

区分 研究科	専門職学位課程			合計
	入学	外国人留学生		
		国費	私費	
法学研究科	203 ^人	- ^人	- ^人	203 ^人
医学研究科	31	2	-	33
公共政策教育部	41	1	1	43
経営管理教育部	44	2	12	58
合計	319	5	13	337

区分 研究科	博士後期課程									
	編入学	外国人留学生		再入学	外国人留学生		進学	外国人留学生		合計
		国費	私費		国費	私費		国費	私費	
文学研究科	5 ^人	- ^人	1 ^人	- ^人	- ^人	- ^人	42 ^人	4 ^人	3 ^人	55 ^人
教育学研究科	4	-	-	-	-	-	25	2	-	31
法学研究科	4	-	-	1	-	-	8	1	6	20
経済学研究科	-	1	1	-	-	-	26	1	4	33
理学研究科	11	2	2	-	-	-	114	3	1	133
医学研究科	12	-	-	-	-	-	7	-	1	20
薬学研究科	9	-	2	-	-	-	24	-	-	35
工学研究科	48	3	9	-	-	-	57	4	9	130
農学研究科	12	2	3	-	-	-	43	3	3	66
人間・環境学研究科	9	-	2	-	-	-	67	4	2	84
エネルギー科学研究科	4	2	2	-	-	-	6	-	-	14
情報学研究科	11	1	1	-	-	-	12	3	-	28
生命科学研究科	3	-	1	-	-	-	38	-	1	43
地球環境学舎	1	-	-	-	-	-	1	-	-	2
合計	133	11	24	1	-	-	470	25	30	694

区分 研究科	博士課程				
	入学	外国人留学生		転入学	合計
国費		私費			
医学研究科	128人	4人	8人	1人	141人
合計	128	4	8	1	141

区分 研究科	一貫制博士課程								
	入学	外国人留学生		小計	編入学	外国人留学生		小計	合計
国費		私費	国費			私費			
アジア・アフリカ地域研究研究科	23人	2人	－人	25人	2人	1人	1人	4人	29人
合計	23	2	－	25	2	1	1	4	29

区分 研究科(学舎)	博士課程											
	編入学	外国人留学生		転入学	外国人留学生		小計	進学	外国人留学生		小計	合計
国費		私費	国費		私費	国費			私費			
地球環境学舎	1人	－人	－人	1人	－人	－人	2人	2人	1人	－人	3人	5人
合計	1	－	－	1	－	－	2	2	1	－	3	5



平成19年度入学者選抜学力試験の結果

平成19年度入学者選抜学力試験(第2次学力検査)の前期日程試験は2月25日(日)・26日(月)および27日(火)に、後期日程試験は3月12日(月)に実施した。

学部別の受験者数、合格者数および入学者数等は次表のとおりである。

(平成19年4月1日現在)

学 部	募集人員 (A)	志願者数 (B)	倍率 (B/A)	第1段階 選抜合格者数	受験者数 (C)	倍率 (C/A)	欠席者数	欠席率	合格者数	辞退者数	追加合 格者数	入学者数
総合人間学部	120											
前期												
文系	65	241	3.7	240	239	3.7	1	0.4	68	-	-	124
理系	55	152	2.8	152	151	2.7	1	0.7	56			
文学部	220	629	2.9	629	617	2.8	12	1.9	223	-	-	223
教育学部	60											
前期												
文系	50	178	3.6	178	172	3.4	6	3.4	51	-	-	61
理系	10	27	2.7	27	27	2.7	0	0.0	10			
法学部	320	867	2.7	867	858	2.7	9	1.0	332	-	-	332
経済学部	230											
前期												
一般	180	512	2.8	512	501	2.8	11	2.1	191	3	-	238
論文	50	302	6.0	175	168	3.4	7	4.0	50			
理学部	311	812	2.6	796	789	2.5	7	0.9	318	1	-	317
医学部	243											
前期	223	604	2.7	573	561	2.5	12	2.1	237	5	-	256
後期	20	146	7.3	146	59	3.0	87	59.6	24			
薬学部	80	223	2.8	223	217	2.7	6	2.7	86	-	-	86
工学部	955	2,221	2.3	2,221	2,189	2.3	32	1.4	960	3	1	958
農学部	300	634	2.1	634	629	2.1	5	0.8	322	-	-	322
小計												
前期	2,819	7,402	2.6	7,227	7,118	2.5	109	1.5	2,904			
後期	20	146	7.3	146	59	3.0	87	59.6	24			
計	2,839	7,548	2.7	7,373	7,177	2.5	196	2.7	2,928	12	1	2,917

[外国学校出身者のための選考の実施結果(外数)]

学 部	募集人員 (A)	志願者数 (B)	倍率 (B/A)	第1次 選考合格者数	受験者数 (C)	倍率 (C/A)	欠席者数	欠席率	合格者数	辞退者数	入学者数
法 学 部	10 ^{人(以内)}	39 ^人	3.9	21 ^人	11 ^人	1.1	10 ^人	47.6 [%]	5 ^人	1 ^人	4 ^人
経 済 学 部	10	49	4.9	21	13	1.3	8	38.1	7	1	6

(注) 受験者数・欠席率は最終教科のものである。

名誉教授称号授与式

4月5日(木)午前11時から時計台記念館国際交流ホールにて名誉教授称号授与式が、副学長、部局長等の出席のもと執り行われた。このたび名誉教授の称号を授与された方は、次の56名である。



(氏名)	(推薦部局)	(氏名)	(推薦部局)
藤井 信吾	(医学研究科)	久保 愛三	(工学研究科)
吉川 潔	(エネルギー理工学研究所)	大嶽 秀夫	(法学研究科)
田中 克	(フィールド科学教育研究センター)	福田 猛	(化学研究所)
三野 徹	(農学研究科)	和田 洋巳	(医学研究科)
大西 近江	(農学研究科)	芦田 讓	(工学研究科)
梅田 康弘	(防災研究所)	中辻 博	(工学研究科)
岡田 康伸	(教育学研究科)	村上 正紀	(工学研究科)
矢野 秀雄	(農学研究科)	坂井 昭夫	(経済研究所)
池淵 周一	(防災研究所)	青山 咸康	(農学研究科)
増田 弘昭	(工学研究科)	酒井 哲郎	(工学研究科)
棚瀬 孝雄	(法学研究科)	鯨岡 峻	(人間・環境学研究科)
丹羽 太貫	(放射線生物研究センター)	中村 行宏	(情報学研究科)
藤田 昌久	(経済研究所)	佐々 恭二	(防災研究所)
島崎 眞昭	(工学研究科)	下遠野 邦忠	(ウイルス研究所)
坂田 完三	(化学研究所)	松井 三郎	(地球環境学堂)
上原 一慶	(経済研究所)	大東 肇	(農学研究科)
橘木 俊詔	(経済学研究科)	高山 知司	(防災研究所)
田中 良和	(理学研究科)	玉田 攻	(人間・環境学研究科)
土屋 和雄	(工学研究科)	高野 幹夫	(化学研究所)
中原 紘之	(地球環境学堂)	山 寄 鉄夫	(エネルギー理工学研究所)
牧 正志	(工学研究科)	上總 康行	(経済学研究科)
愛宕 元	(人間・環境学研究科)	武田 信生	(工学研究科)
深尾 昌一郎	(生存圏研究所)	竹内 典之	(フィールド科学教育研究センター)
本多 義昭	(薬学研究科)	中込 良廣	(原子炉実験所)
伊藤 維昭	(ウイルス研究所)	富田 博之	(人間・環境学研究科)
西田 吾郎	(理学研究科)	竹市 雅俊	(生命科学研究科)
森島 信弘	(工学研究科)	嶋本 利彦	(理学研究科)
長屋 政勝	(人間・環境学研究科)	小玉 英雄	(基礎物理学研究所)